



TEL 045-663-2228
 中区元町2-108
 営業時間/10:00~19:00
 定休日/月曜（祝日の場合は翌日休）

横濱増田窯
 陶磁器

クラフトマンシップ

[生活用品] 6

横濱焼の精神を踏まえ
 新たな挑戦を続ける



YOKOHAMA MASUDAGAMA

「父と比べられることはプレッシャーだけど、それも職人としての糧にしたい」と増田博一さん

「ブリカを作るのではなく、横濱焼を作り上げた先人たちの精神を継承することに意義があると思うんです」
 横濱増田窯代表の増田博一さん（ひろかず）はそう言うのと、横濱焼の歴史について教示してくれた。

事の始まりは、開港間もない明治初期。欧米に輸出された日本製の陶磁器が高い評価を受けていた。そうした新しい市場を求め、意気盛んな陶工が全国から横濱に集結。彼らはそれまで目にしたことがなかった洋食器に触発され、和洋折衷の斬新な陶磁器を次々と作り出す。そうした作品は横濱焼と呼ばれ、海外の博覧会でも好評を博した。

横濱焼の復興への思い

だが、震災と第二次世界大戦を経て、横濱焼の窯は壊滅。長らく途絶えていた横濱焼を復活させたのが、博一さんの父、博一さんだ。昭和四十（一九六五）年に窯を起こし、和洋の青色を混ぜ合わせた「ヨコハマブルー」を用いた陶磁器などで注目を集めた。後を継ぐ博一さんも、二十四金を大胆にあしらった作品などを意欲的に製作している。「過去の横濱焼の作品を見る

と、先端技術などを貪欲に取り込んでいて何でもありのように思えます。でも、よく見ると作品それぞれに核となるものがある。それが職人としての心のありよう、精神性なんです」

伝統をおろそかにせず、新たな挑戦を恐れず。そうした横濱焼の先達の精神にこそ学ぶべきものがあると博一さんは語る。

「横濱焼の歴史は百五十年だから、伝統と呼べるようなものはないかもしれない。でも、僕らが現在進行形で伝統をつくっているんだという気概はあります」

職人精神でものを売る

八年前に父の博一さんが他界。その後を受けた博一さんは現在、陶工としてだけでなく、約三十人の従業員を抱える経営者としての顔も持つ。

「父が生前、『ものを作ることも売ることと同じだ』と言っていました。販売員も会社経営者も、心の持ちよう次第では職人たりうろと思うんです」

撮影の合間、お客さんが訪れた。その方にすっと近寄り、横濱焼の歴史や魅力、器のある生活の楽しさについて真摯に語る博一さんの姿が印象に残った。